

感情的依存欲求および介護期待における  
サポート・リソースの選択的認知  
—家族認知およびトラブルの有無との関連において—

杉井潤子  
(奈良教育大学)

The Alternative Recognition of Social Support Resources in case of the Emotional  
Dependence and Care Expectation

Junko Sugii

家族の一員であるという家族認知や、家族間のトラブルやもめごとの有無によって、いざというときに感情的に依存したいと思ったり、介護をしてもらいたいと期待したりすることがどのように影響を受けるのか、とりわけ配偶者や親・兄弟姉妹、子どもやその配偶者といった家族・親族サポート・リソースの選択性にどのような影響がみられるのかを検証した。その結果、男性、女性ともにトラブルやもめごとを経験しながらも、9割を超えるひとが配偶者を家族の一員だとみなし、感情的依存欲求や介護期待を寄せるサポート・リソースの第一位に「配偶者」を挙げていること、家族の一員として認知することとトラブルやもめごとの有無とのあいだで、唯一関連がみられたのが「配偶者」という存在であること、また「配偶者」をサポート・リソースとして選択するには配偶者自身を家族の一員としてみなしているかどうかによって影響をうけることが判明した。

キーワード：家族認知、トラブルやもめごと、サポート・リソースの選択

## 1. 問題意識および目的

家族の変容とともに、家族機能の弱体化あるいは外部代替化が叫ばれ、家族外システムとしてソーシャルサポートネットワークに関して注目が寄せられて久しい。本稿では、こうしたなかで相次いで提示された2つの概念「ファミリズム」と「ワイドー・ファミリー」に注目して、サポート・リソースの選択性について検証していきたい。

ファミリズム (Familism) とは、「個人にとって、不可欠な、相互扶助（経済的なもののみならず、育児、老人介護、病人の看護等における労力の提供、支え合いも含まれる）および感情的依存の要求を充足する集団の機能」を意味する (Dizard, F.G. & Gadlin, H. 1990)。「ファミリズムを担う集団は当然、家族（ファミリー）であるかのように考えられ

がちであるが、前近代においては、ファミリーズムは親族ネットワークや地域社会によって担われていた。ファミリーズムとファミリーが重なるのは、歴史的にみれば、近代化以降の一時期に過ぎない。現代社会においては、ファミリーズムのファミリーからの再度の離脱が認められ、あらためてパブリック・ファミリーズムへの期待が寄せられ、公的領域と私的領域の線引きのやり直し、あるいは線で区切るという発想そのものの転換の必要性がある」と言われている（井上,1995：5-14）。

また、ワイドー・ファミリー（Wider family）とは、家族概念が伝統的規範である血縁や姻縁に基づいた親族という範疇から拡大してきていることを示唆し、経済的かつ情緒的な関係性のうえで成立し、伝統的な家族資源(traditional family resources)が個々人のライフスタイルのうえで利用できないとき、あるいは害を与えかねないときには、サービス(services)、やり取り(exchanges)、援助(help)、世話(caring)、助言(advice)、そして情緒的サポート(emotional support)は、"wider families"のなかで与え得られるとされる。さらにワイドー・ファミリーは、さまざまに多様化した、いわゆる非伝統的な家族形態(variant or nontraditional families)とは区別されるものと規定し、ライフスタイルのなかから生まれ出る "wider families"は、あくまでもまったくの自由意志に基づくものであり、これまで家族概念を規定してきた血縁や姻縁とは関係がないことをあらためて強調している（T.D.Marciano & M.B. 1991）。

今、この二つの概念に着目したとき、感情的依存の要求充足や相互扶助という機能を意味するファミリーズムは、現代社会において、まさに家族への集中的依存から離れ、家族外へと拡散していく状況にあると解釈できるのではないかと思われる（杉井, 1998）。

では、ファミリーズムはどのような形で家族への集中的依存から拡散していくのであろうか。基本的な問題意識として、血縁や法的関係を根拠として感情的依存や相互扶助を期待する規範が揺らぎ、家族が絶対的なサポート・リソースではなくなりつつある状況下で、サポート・リソースとしての家族の限界と可能性を考えることを通して、ファミリーズムのゆくえについて考察していきたいと思っている。

NFRでは、問30（調査票 p.19）において、情緒面、経済面、労力的、身辺介護面それぞれの問題状況下で、「配偶者」「親・兄弟姉妹」「子ども・その配偶者」「その他の親族」「友人・同僚」「近所の人」「専門家・サービス機関」のうちの誰に頼りたいと考えるのか、あるいは「誰もいない」と考えるのかを多重回答で問うている。家族・親族、友人、近隣、フォーマルな社会的リソースのなかから、選択的に認知されるサポート・リソースは人によって異なる。いざという時に、私たちは何を根拠に、誰に頼ろうと思うのか、あるいは誰が頼れると判断するのであろうか。サポート・リソースの選択において、果たしてどのような要因が影響しているのであろうか。

本分析においては、感情的依存欲求（情緒面）および介護期待（身辺介護面）のそれぞれの問題状況下に焦点を絞って、いかにサポート・リソースを選択的に認知するのかという



も・その配偶者」、「その他の親族」、「友人や職場の同僚」、「近所（地域）の人」、「専門家やサービス機関」のサポート・リソースにおいて、「はい（頼る）」= 1、「いいえ（頼らない・頼れない）」= 0とし、あるいは「誰もいない」= 1（「誰もいない」に丸をつけない= 0）とした。

独立変数は、基本属性としての性別（q01）および年齢（q02s）、学歴（q040）、年収（q10）のほか、家族認知に関する諸変数、家族・親族間のトラブルやもめごとの有無に関する諸変数である。性別は「男性」=1、「女性」=0とし、学歴は旧制中・新制高等学校および新制各種専門学校卒業までを「中等教育」=0とし、新制短大・旧制高等学校および大学卒業以上を「高等教育」= 1とした。また、年収については、400万円未満を「低収入」=0とし、400万円以上を「高収入」=1とした。さらに、家族の一員であると思うかどうかという家族認知では、「配偶者」（q1619）、「子ども」（第1子 q2405a8）、「実父」（q25a5）、「実母」（q25b5）、「兄弟姉妹」（一番上 q2602a7）に関する変数を使用し、家族であると考え「はい」= 1とし、「いいえ」・「どちらともわからない」= 0とした。また、この一年間のトラブルやもめごとの有無では、問29の「配偶者」とのトラブル（q2901）、「18歳以上の子ども」とのトラブル（q2902）、「父母」とのトラブル（q2903）、「兄弟姉妹」とのトラブル（q2904）に関する変数を使用し、トラブルやもめごとが「あった」= 1とし、「なかった」= 0とした。

分析はSPSS PC+ のプログラムを用いて、性別のクロス集計（カイ二乗検定）、2変数間の相関分析のほか、ロジスティック回帰分析を行なった。性別と年齢、学歴、年収のほか、配偶者・子ども・実父母・兄弟姉妹に対する家族認知の有無を表す変数、さらには配偶者・子ども・実父母・兄弟姉妹とのトラブルの有無を表す変数を投入し、それぞれ影響の大きさとその変化をみていくことにした。

### （3）主な作業仮説

配偶者、子ども、父母、兄弟姉妹に対する家族の一員であると思う意識や、トラブルやもめごとの有無によって、問題を抱えたときに感情的に頼りたいと思う人の選択的認知は影響を受ける。

配偶者、子ども、父母、兄弟姉妹に対する家族の一員であるとする意識や、トラブルやもめごとの有無によって、介護が必要になったときに介護をしてほしいと思う人の選択的認知は影響を受ける。

### 3. 分析結果および考察

#### (1) 家族認知およびトラブルやもめごとの有無

##### (a) 性別にみる家族認知

家族の一員だと思いかどうかという問いかけを、それぞれ配偶者、子ども、父親、母親、兄弟姉妹に行なった結果を性別に示したものが図 1 である。男性、女性ともに、配偶者、子どもに対して 9 割を超える比率で家族の一員だとみなしているが、とくに配偶者について性差が認められ ( $p<.01$ )、男性のほうが女性よりも、より配偶者を家族の一員だとみなしている結果となっている。この性差は実の父親や母親に対する家族認知においても同様に認められ ( $p<.001$ )、男性のほうが女性よりも、既婚後も実の父親および母親を家族の一員だと認知していることが分かる。また、兄弟姉妹については、男女ともに約 4 割の比率にとどまり、性差も認められなかった。

まとめると、男性のほうが女性よりも、配偶者も、父親も、母親についても、より家族の一員だと思いう意識を強くもっていることが明らかとなっている。

##### (b) 性別にみるトラブルやもめごとの有無

この一年間に、配偶者や子ども、実の父親・母親、兄弟姉妹とのあいだでトラブルやもめごとがあったかどうかをたずねた結果を性別に示したものが図 2 である。全体でみていくと、配偶者とのトラブルやもめごとが一番多く、男性、女性ともに 2 割を超えている。男性では、次いで、子どもとのトラブルやもめごと、実の父親・母親とのトラブルやもめごと、兄弟姉妹とのトラブルやもめごとの順となっている。一方、女性では子ども、兄弟姉妹、実の父親・母親とのトラブルやもめごとの順となっている。性差が認められたのは、実の父親・母親とのトラブルやもめごとの有無であり ( $p<.05$ )、男性のほうが女性よりも、より実の父親・母親とのあいだでトラブルやもめごとを経験しているといえる結果となっている。

##### (c) 家族認知と家族間トラブルやもめごとの有無の相関関係

家族の一員だとみなす意識と、トラブルやもめごとがあったこととはどのように関連しているのだろうか。先の図 1、図 2 の結果を併せて考察すると、男性の場合には、女性よりも、より実の父親・母親とのトラブルやもめごとを経験しながらも、家族の一員として、配偶者や実の父親、母親を認知していることが明らかとなっているが、このような家族の一員であるという認知と、家族間のトラブルやもめごととのあいだに直接的な相関関係があるかどうかをみたところ (表 2 参照)、男女別ではとくに差異は認められず、男性、女性ともに、「配偶者」についてのみ負の相関関係が認められた ( $p<.001$ )。

すなわち、「配偶者」の場合、家族の一員だと思いう意識とトラブルやもめごとの有無とは密接な関連があり、配偶者とのあいだでトラブルやもめごとがあったとき、その配偶者を家族の一員とは思わないという状況があることを結果は示している。そのほかの子どもや、

実の父親、実の母親、兄弟姉妹とのあいだでは統計的検定に耐え得るほどの有意差は認められない。配偶者という存在は、その他の家族・親族関係と比べて、なんらかの特異性をもつものであることが推察される。血縁という関係性が影響を及ぼすのであろうか。これは興味ある知見であり、以下、ここに示される配偶者に対する認識の特異性がサポート・リソースの選択的認知にも影響を及ぼすかをみていくことにしたい。

## (2) サポート・リソースの選択的認知

### (a) 性別にみる感情的依存欲求（情緒面）

「問題を抱えて、落ち込んだり、混乱したとき」、いったい誰に頼ろうとするのであろうか。誰に頼りたいと思うのであろうか。ここでは、感情的依存欲求におけるサポート・リソースの選択性をみていくことにする。回答は多重回答であり、性別に有意差が認められるかも併せて示したものが図3である。

全体でみていくと、男性、女性ともに約8割近くが「配偶者」に頼ろうと思ひ、また頼りたいと考えていることが分かる。ここでは性差は認められないが、その他のサポート・リソースと比べると、男性の第2位である親・兄弟姉妹の比率が約2割強、女性の第2位である親・兄弟姉妹の比率が約4割弱であることを考えると、男性、女性ともに共通して、「配偶者」への感情的依存欲求が傑出して高いことが判明する。

性差が認められたのは、そのほかの親・兄弟姉妹、子どもやその配偶者、友人・同僚、近所（地域）の人、専門家・サービス機関、そして誰もいないという、以上その他の親族を除く、6つのサポート・リソースである。くわしくみていくと、男性の場合、配偶者への感情的依存欲求を除くと、女性よりも、より「専門家・サービス機関」に頼ろうと思ひ ( $p<.01$ )、もしくは「誰もいない」と考えて孤立してしまう ( $p<.05$ ) 傾向が強いことが分かる。一方、女性は、配偶者への感情的依存欲求のほか、親・兄弟姉妹、子どもやその配偶者、友人・同僚、近所（地域）の人に、男性の場合よりも、より頼ろうとする傾向が強い。このことは、男性、女性ともに配偶者を情緒的にもっとも頼りに思いながら、男性は配偶者のほかには、家族外のフォーマルなサポート・リソースに目を目を向けようとするのに対し、女性は家族・親族、友人、近隣などのインフォーマルなサポート・リソースに目を向ける傾向があることを示していると言える。

### (b) 性別にみる介護期待（身辺介護面）

「寝たきりなどで、介護が必要とするようになったとき」、いったい誰に頼ろうとするのであろうか。誰に頼りたいと思うのであろうか。ここでは、介護期待におけるサポート・リソースの選択性をみていくことにする。回答は多重回答であり、性別に有意差が認められるかも併せて示したものが図4である。

男性、女性ともに配偶者がサポート・リソースとして第一位を占めていることは感情的依存欲求のときと変わりはないが、介護期待の場合、配偶者を頼りとするかどうかで性差

が認められ ( $p<.001$ )、男性の約 8 割が妻に頼りたいと思っているのに対して、女性の場合、夫に介護期待を寄せるのは 6 割 5 分とどまる。その代替として、女性は男性よりも、親・兄弟姉妹や、子どもやその配偶者、あるいはフォーマルなサポート・リソースである専門家やサービス機関に、より介護期待をよせていることが明らかとなる ( $p<.001$ )。男性は妻中心の介護期待志向をもち、一方、女性は夫のほか、家族・親族のインフォーマルなサポート・リソースに加え、フォーマルなサポート・リソースをも視野に入れた選択的認知をもっていることが分かる。

#### (c) サポート・リソースの選択的認知における相関関係

感情的依存欲求および介護期待において、それぞれ男性、女性ともに、配偶者を第一位のサポート・リソースとして選択的に認知しながらも、配偶者にどの程度の期待を寄せるのか、あるいはその他の家族・親族をはじめとするインフォーマルなサポート・リソースや専門家等のフォーマルなサポート・リソースに対する依存欲求や期待の程度に性差が認められた。では、サポート・リソースの選択性において、リソース間に相互にどのような関連性があるのだろうか。それをそれぞれ感情的依存欲求および介護期待別にみたものが表 3 である。男女別にみてもとくに顕著な性差はみとめられなかったため、いずれも全数で提示したものである。

まず感情的依存欲求の面からみていくと、配偶者を選択するかどうかということと、友人・同僚を選択することとのあいだに負の相関関係が認められ ( $p<.001$ )、配偶者に感情的に依存しようと思える人は友人・同僚を選ばない、反対に配偶者に感情的に依存したくないと思う人は友人・同僚を選ぶというリソース間の相互関係が明らかとなった。このような負の相関がみられたのは、この他では当然のことながら誰も選ばないという場合のみである。

そのほかの親・兄弟姉妹、子どもやその配偶者、その他の親族、友人・同僚、近所（地域）の人といったインフォーマルなサポート・リソース間ではほとんどの場合、リソース間相互に正の相関関係が認められ、たとえば親・兄弟姉妹に感情的に頼れると思う人は、子どもやその配偶者、その他の親族、友人・同僚、近所（地域）の人や専門家などにも頼れると考えていることが分かる。

感情的に頼れると思うかどうか、あるいは頼ろうと思うかどうかということを考えるとき、男性にとっても、また女性にとっても第一位のサポート・リソースとして想定される配偶者という存在が、その他の家族・親族リソースなどと正の相関をもたないというのは非常に興味ある結果である。配偶者というリソースがその他のサポート・リソースとは異なる性質を有するものではないかと考えられる。

次に、介護期待の場合はどうであろうか。介護期待における配偶者というサポート・リソースに注目すると、配偶者を選択するかどうかということと、子どもやその配偶者、あるいは専門家やサービス機関を選択することとのあいだに負の相関関係が認められた

( $p<.001$ )。配偶者に介護期待を寄せられる人は子どもやその配偶者、あるいは専門家やサービス機関を選ばない、反対に配偶者に介護を期待できないと思う人は子どもやその配偶者、あるいは専門家やサービス機関を選ぶというリソース間の相互関係が明らかとなった。また、感情的依存欲求においては認められなかったが、親・兄弟姉妹とのあいだで正の相関関係があり ( $p<.001$ )、配偶者に介護期待と寄せるとともに、親・兄弟姉妹にも同時に介護期待を寄せている状況があることが確認された。このほかでは、親・兄弟姉妹と専門家・サービス機関とのあいだでも負の相関関係が認められ、親・兄弟姉妹に介護を期待できると思う人は専門家を選ばないし、また専門家に介護を期待したいと思う人は親・兄弟姉妹に頼ろうとは思わないと言える結果となっている ( $p<.05$ )。

寝たきりになったときに介護を期待できると思うかどうか、あるいは介護をしてほしいと望むかどうかということを考えたとき、先の感情的依存欲求のときと同様に、男性にとっても、また女性にとっても第一位のサポート・リソースとして想定される配偶者であるが、やはりその他の家族・親族リソースなどとは異なる性質を有し、親・兄弟姉妹とは同列に、子どもやその配偶者、専門家やサービス機関とは対立的にとらえられるサポート・リソースであることが分かる。

### (3) サポート・リソースの選択的認知要因分析—家族認知およびトラブルやもめごとの有無との関連—

先述の(1)(2)で、家族の一員であると思うかどうかという家族認知や、この一年間でのトラブルやもめごとの有無、さらには感情的依存欲求および介護期待におけるサポート・リソースの選択的認知において、配偶者という存在の特異性が明らかになるとともに、それぞれのサポート・リソースにはそれを選択するだけのなんらかの要因が働いているのではないかという推測が成り立つ。

そこで、以下、性別、年齢、学歴、収入の基本属性に加え、配偶者や子ども、実の父親、実の母親、きょうだいそれぞれに対する家族認知(家族の一員と思うかどうか)、さらには配偶者、子ども、父親・母親、兄弟姉妹とのトラブルやもめごとの有無によって、いかに影響を受けながら、「配偶者」「親・兄弟姉妹」「子ども・その配偶者」「その他の親族」「友人・同僚」「近所(地域)の人」「専門家・サービス機関」、あるいは「誰もいない」をそれぞれサポート・リソースとして選択的に認知するのかをロジスティック回帰分析を通してみていくことにする。

#### (a) 感情的依存欲求(情緒面)

表4は、感情的依存欲求における個々のサポート・リソースごとに「頼れる(あるいは頼ろう)」として選択したかどうかをみたものである。個別にみていくと、「配偶者」を選択するかどうかにおいて有意な影響を及ぼしたのが、配偶者を家族の一員と思うかどうかという家族認知であった。他の家族・親族に対する家族認知やトラブルの有無によっては



影響を受けず、配偶者を家族だと思えることが問題を抱えて、落ち込んだり、混乱したときに頼れると思ひ、頼ろうと考えることに結びついていると言える。また、「親・兄弟姉妹」については、対象者の年齢との関連が認められ、年齢が若いほど、親・兄弟姉妹もまた若いことにより、サポート・リソースとして選択されると言える結果となっている。次に、「子ども・その配偶者」では、女性で、年齢が高く、収入が低く、さらに配偶者を家族の一員だとみなさず、かつきょうだいについてもトラブルやもめごとがあり、家族の一員とは思えないときに、サポート・リソースとして子どもやその配偶者を選択するということが明らかとなっている。さらに「友人・同僚」に注目してみると、年齢が若く、収入が高く、きょうだいも家族の一員だとみなしながら、子どもや兄弟姉妹とのトラブルやもめごとを抱えているときに、友人や同僚に感情的に頼りたいと思う状況があることがわかる。また、「近所（地域）の人」を選ぶときには兄弟姉妹とのあいだでトラブルやもめごとがあることと関連していることも明らかとなっている。

まとめると、「配偶者」に問題を抱えて、落ち込んだり、混乱したときに頼ろうと思うには家族の一員としての認知が必要であるが、そのほかの家族・親族サポート・リソースにおいてはそれぞれ家族認知との関連は認められない。あらためて家族だと思ふからこそ頼ろうとするという関係性が成立するのは「配偶者」とのあいだだけであることをデータは示している。また、「子どもやその配偶者」に頼ろうと思うときには、配偶者やきょうだいを家族の一員だとは思えないときであり、配偶者にみられたように、あらためて子どもやその配偶者を直接、家族の一員だと認知することとは関連がみられない。配偶者というサポート・リソースと子ども・その配偶者というサポート・リソースの選択に際しての違いは明確であり、家族としての再確認の作業が配偶者との関係では求められると言える。それに対して、子どもとの関係性は代替的要素を含む、補償機能を備えたリソースと言えるのではないだろうか。

#### (b) 介護期待（身辺介護面）

表5は、寝たきりなどで、介護が必要とするようになったときという介護期待において、サポート・リソースごとに「頼れる（あるいは頼ろう）」として選択したかどうかをみたものである。個別にみていくと、「配偶者」を選択するかどうかにおいて有意な影響を及ぼしたのが、性別、年齢のほか、配偶者、母親に対する家族認知であり、男性で、年齢が若く、配偶者を家族の一員とみなし、実の母親に対しても家族の一員としての意識をもっている場合に、配偶者をサポート・リソースとして選択することが明らかとなった。また、「親・兄弟姉妹」に対しては、年齢が若く、収入が低い場合に選択すること、「子どもやその配偶者」に対しては、兄弟姉妹とのあいだでトラブルやもめごとがあるときに選択すること、また、「専門家やサービス機関」を選ぶのは、女性で、高学歴の人であることが判明した。

まとめると、先の感情的依存欲求における結果と同様に、介護期待においても、「配偶者」に介護をしてほしいと思ひ、介護をしてくれるだろうと考えるには、配偶者に対して家族

の一員としての認知が必要であることをデータは示している。このことは、同様にそのほかの家族・親族サポート・リソースにおいてはそれぞれ家族認知との関連は認められない。

介護期待においても、あらためて家族だと思ったからこそ頼らうとするという関係性が成立するのは「配偶者」とのあいだだけであることを言える。また、介護期待において、このほか注目すべきは、感情的依存欲求で「子ども・その配偶者」にみられたような代替・補償的機能が危険率10%ではあるが確認されたことであり、配偶者を家族の一員とは思えず、配偶者とのあいだでトラブルやもめごとがあるときに、「子ども・その配偶者」を選択する傾向があると言える。また、専門家やサービス機関を選択するのは、家族・親族とのあいだでの家族認知やトラブルやもめごとの有無によって影響を受けるのではないことも明らかとなっている。

#### 4. 結論

日常生活場面で、「家族だから…」、あるいは「夫婦だから」「親子だから」というレトリックが何気なく使われることが多いが、その根拠となるものがあまりにも曖昧で、不明確なままであることに気づかされる。そして、そのレトリックがそのまま感情的依存欲求や介護期待をもったり、あるいはもたらしたりすることにもつながることが多いと考えられる。本稿の問題意識は、血縁や法的関係を根拠として感情的依存や相互扶助を期待する規範が揺らぎ、もはや家族が絶対的なサポート・リソースではなくなりつつある状況下で、サポート・リソースとしての家族の限界と可能性を考えることを通して、ファミリズムのゆくえについて考察することにある。家族だからというレトリックを、具体的には家族の一員であるという家族認知や、家族間のトラブルやもめごとの有無でとらえることとし、いざというときに感情的に依存したい（あるいは依存できる）と思ったり、介護をしてもらいたい（あるいは介護をしてもらえる）と期待したりすることにどのように影響をおよぼすのか、とりわけ配偶者や親・兄弟姉妹、子どもやその配偶者といった家族・親族サポート・リソースの選択性、友人・同僚、近所（地域）の人といったインフォーマルなサポート・リソースの選択性、専門家やサービス機関といったフォーマルなサポート・リソースの選択性にどのような関連がみられるのかを検証してきた。

結果を約言すると、個別にみていくと性差が認められるものの、全体を通してみると、男性、女性ともにトラブルやもめごとを経験しながらも、9割を超えるひとが配偶者や子どもを家族の一員だとみなし、感情的依存欲求や介護期待を寄せるサポート・リソースの第一位に「配偶者」を挙げていた。そのような状況のなかで、家族の一員として認知することとトラブルやもめごとの有無とのあいだで、唯一関連がみられたのが「配偶者」という存在であり、トラブルやもめごとによって家族の一員としてみなすかどうか左右されるという、その他の家族・親族関係と比べて、きわめて「不安定」とも言える関係であること

が明らかとなった。

このような「配偶者」に対する特異な関係性はサポート・リソースの選択においても顕著に表れ、親・兄弟姉妹、子どもやその配偶者、その他の親族などの家族・親族サポート・リソース間で認められたような相互代替性、補償性は介護期待における親・兄弟姉妹を除き、認められなかった。すなわち、サポート・リソースとしての配偶者は、その他の家族・親族サポート・リソースなどとは異なる選択要因が働いていることが明らかとなった。

さらに、ロジスティック回帰分析によって個々のサポート・リソースの選択要因を分析したところ、感情的依存欲求においても、介護期待においても、「配偶者」をサポート・リソースとして選択するには配偶者自身を家族の一員としてみなしているかどうかによって影響をうけることが判明した。この傾向はその他の家族・親族サポート・リソースの選択においては認められなかったことである。サポート・リソースの第一位に挙げられる「配偶者」という存在ではあるが、それはその他の家族・親族サポート・リソースとの比較のなかで選択されるものではなく、家族という意識によって大きく左右されるものであり、安定しているようであり、他方非常に不安定な要素をはらむと考えられる。ファミリーズムのゆくえを考えると、サポート・リソースとしての「家族」の限界と可能性がこのあたりに潜んでいるように思われる。

表1 分析対象 1404 名の基本属性

性別 ダミー変数=男性 1、女性 0	男性	625	44.5%
	女性	779	55.5%
年齢	平均値	52.71	
	S.D.	6.74	
	Min.	38	
	Max.	76	
学歴 ダミー変数=高等教育 1、中等教育 0	高等教育	324	23.5%
	中等教育	1056	76.5%
	n.s.	24	
年収 ダミー変数=高収入 1、低収入 0	高収入	507	36.6%
	低収入	878	63.4%
	n.s.	19	
	計	1404	100.0%

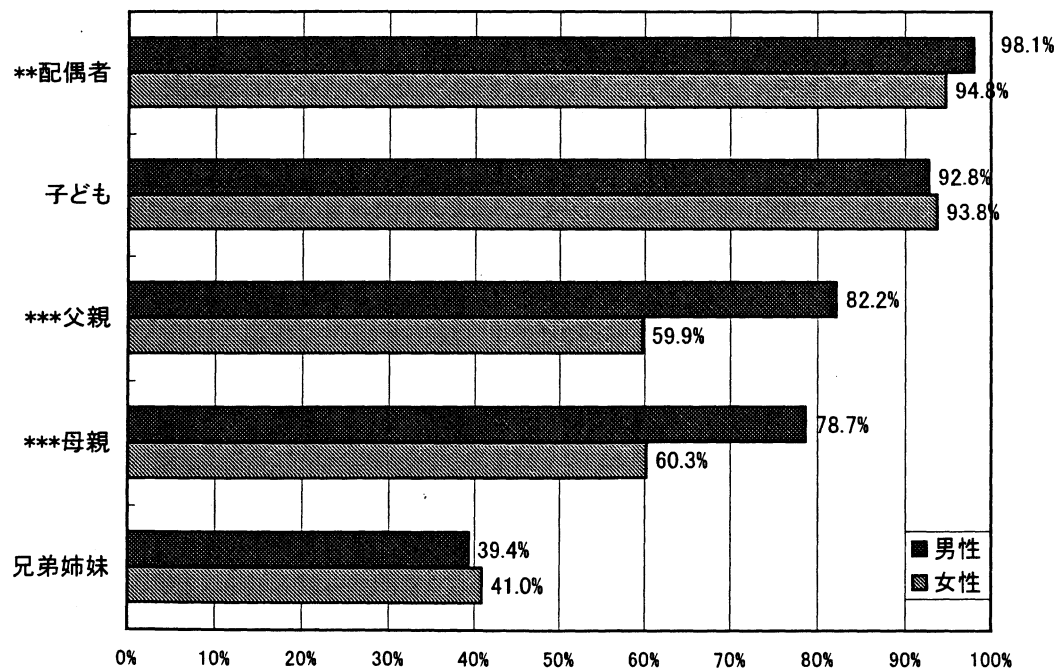


図1 家族認知：家族の一員だと思う比率

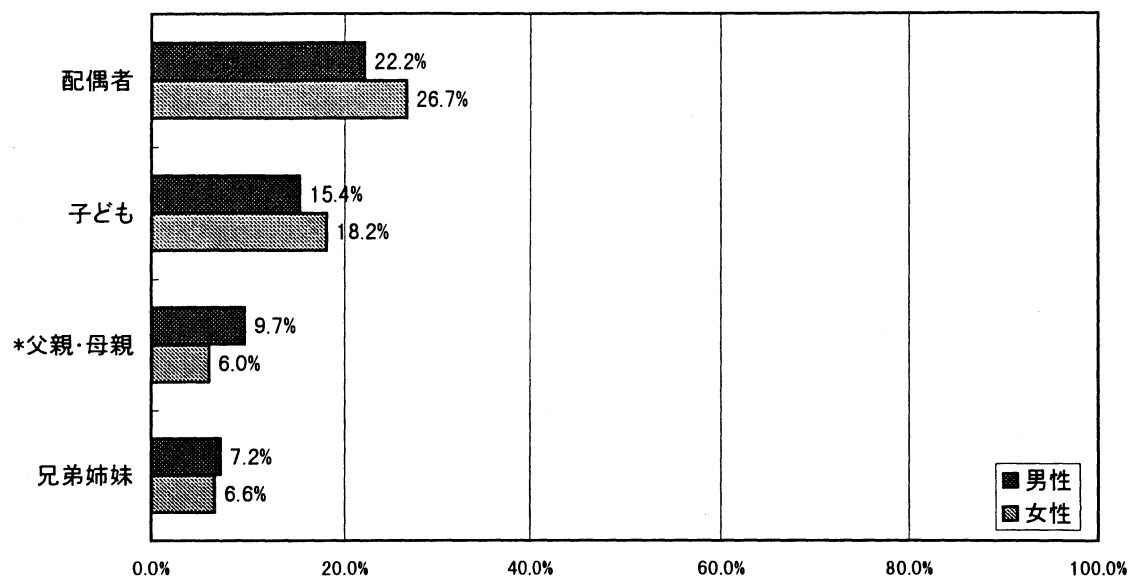


図2 トラブルやもめごとが有ったとする比率

表2 家族認知と家族間トラブルの有無における相関関係  
(pearsonの相関係数 有意差のあったもののみを表示)

家族認知	配偶者	子ども	父親	母親	兄弟姉妹
配偶者とのトラブルの有無	***負	-	-	-	-
子どもとのトラブルの有無	-	-	-	-	-
父親・母親とのトラブルの有無	-	-	-	-	-
兄弟姉妹とのトラブルの有無	-	-	-	-	-

p <.001

\*\*\* p

<.01 \*\*

p <.05 \*

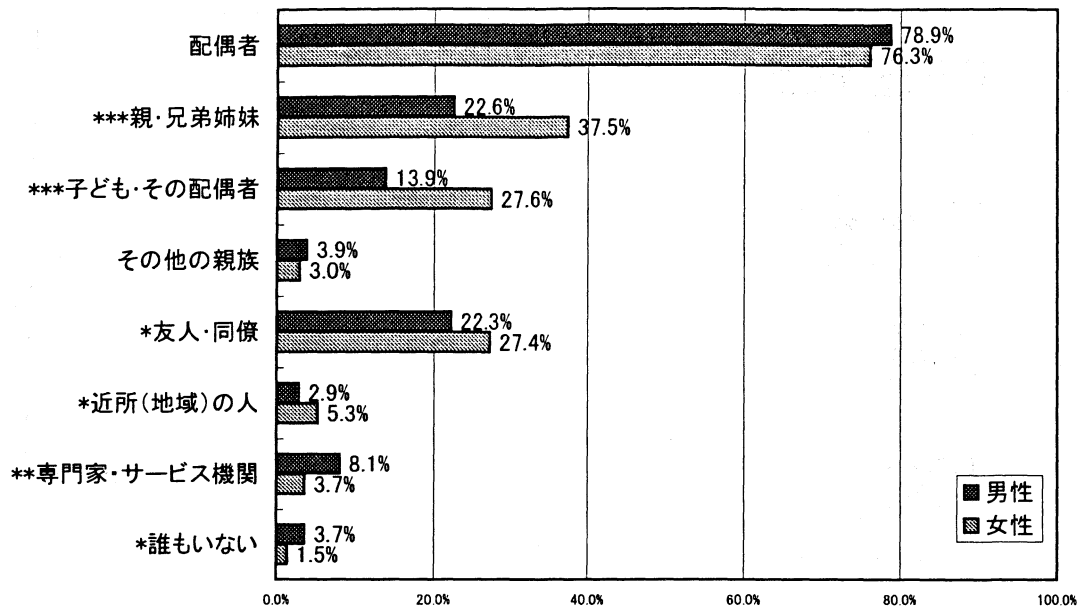


図3 感情的依存欲求におけるサポートリソースの選択

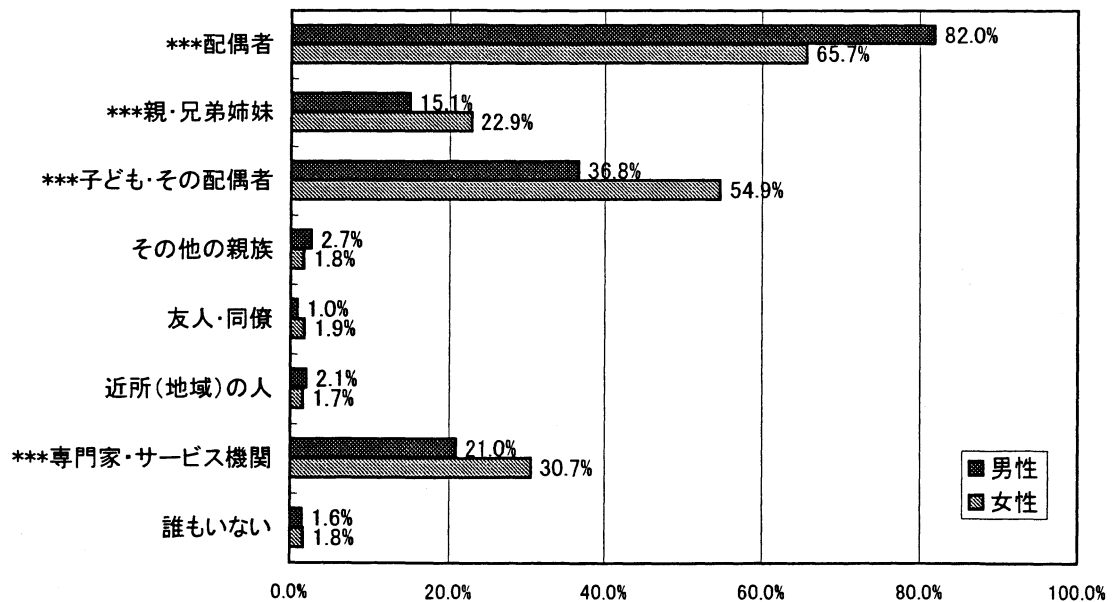


図4 介護期待におけるサポートリソースの選択

表3 サポート・リソースの選択的認知における相関関係

(pearsonの相関係数 有意差のあったもののみを表示)

感情的依存欲求

	配偶者	親・兄弟 姉妹	子ども・そ の配偶者	その他の 親族	友人・同 僚	近所(地 域)の人	専門家・ サービス 機関	誰もいな い
配偶者								
親・兄弟姉妹	-							
子ども・その配偶者	-	***						
その他の親族	-	***	***					
友人・同僚	***負	***	**	**				
近所(地域)の人	-	***	***	***	**			
専門家・サービス機関	-	*	*	***	-	**		
誰もいない	***負	***負	**負	-	**負	-	-	

介護期待

	配偶者	親・兄弟 姉妹	子ども・そ の配偶者	その他の 親族	友人・同 僚	近所(地 域)の人	専門家・ サービス 機関	誰もいな い
配偶者								
親・兄弟姉妹	***							
子ども・その配偶者	***負	***						
その他の親族	-	***	**					
友人・同僚	-	**	-	***				
近所(地域)の人	-	*	**	***	***			
専門家・サービス機関	***負	*負	-	-	-	-		
誰もいない	***負	*負	***負	-	-	-	**負	

p < .001 \*\*\* p < .01 \*\* p < .05 \*

表4 感情的依存欲求：サポートリソースとしての認知の有無

	配偶者	親・兄弟姉妹	子ども・その配偶者	その他の親族	友人・同僚	近所(地域)の人	専門家・サービス機関	誰もいない
性別(男性=1、女性=0)	.0734	-.5189	-1.0543 *	.0266	-.1830	-.5236	.3236	1.7302 +
年齢	-.0324	-.0417 +	.0538 *	.0070	-.0645 *	-.0660	.0251	.0346
学歴(高等教育=1、中等教育=0)	.5301	.1302	.2787	.1781	.3775	.3902	.4551	-.3095
収入(高収入=1、低収入=0)	-.6242	-.4342	-.9360 *	-2.3075 *	1.1270 ***	-8.2286	.2020	-.4665
家族認知：配偶者	1.8335 ***	-.0666	-1.5591 **	-.3157	-.0473	-1.4194	.0155	-.9139
家族認知：子ども	-.0023	.1112	1.3570	-1.0461	.2888	-.0518	-1.5732 +	7.1195
家族認知：父親	.3308	.1969	-1.4241	2.5752	-.1237	.5493	.8270	.1026
家族認知：母親	-.0003	.0641	1.6252	-1.2579	-.7327	-.4328	.6478	-.8152
家族認知：きょうだい	-.3429	.2255	-.8118 *	.0263	.7876 **	.4166	-1.3449 +	.1796
トラブルの有無：配偶者	-.1682	.1414	.2028	-.2809	.2870	-.0937	1.3461 +	-.0115
トラブルの有無：子ども	-.2645	-.1620	.2443	-.4026	.7146 *	-.6402	-.4770	-.0807
トラブルの有無：父親・母親	.2344	-.6715	-1.0274	.3065	-.5821	-.7579	.8446	1.1403
トラブルの有無：兄弟姉妹	-.1302	.4824	1.3547 *	-5.9760	1.1164 *	2.1365 *	-6.2488	-7.3954
定数項	1.2165	1.4068	-3.4733 *	-2.8950	1.5661	1.4357	-4.7762	-11.9234
モデル $\chi^2$ (df=13)	29.905 **	27.269 *	53.824 ***	14.847	51.464 ***	24.239 *	16.915	10.231

数値は非標準化ロジステック回帰係数

p < .001 \*\*\* p < .01 \*\* p < .05 \* p < .10 +



表5 介護期待：サポートリソースとしての認知の有無

	配偶者	親・兄弟姉妹	子ども・その配偶者	その他の親族	友人・同僚	近所(地域)の人	専門家・サービス機関	誰もいない
性別(男性=1、女性=0)	.9328 **	-.2133	-.4532	-.7604	-1.3762	.4541	-.7668 *	-.5042
年齢	-.0693 **	-.0550 *	-.0026	-.0720	.0882	-.1165	.0178	.0109
学歴(高等教育=1、中等教育=0)	.5746 +	.0067	.3506	-.2985	.5669	.1627	1.0163 ***	-.2412
収入(高収入=1、低収入=0)	.2606	-.7126 *	-.4030	.2319	-.3320	-1.1697	.1435	-.0537
家族認知:配偶者	1.9335 ***	-.3965	-.8891 +	-1.2465	8.1961	-2.7208 *	.5268	-1.9060
家族認知:子ども	.1351	.1575	.2283	-1.4837	5.8549	-.0758	.2192	6.9701
家族認知:父親	-2.2981 +	.1461	.0947	5.6577	1.4820	1.6640	.2773	5.7835
家族認知:母親	2.4997 *	.7707	.0238	5.2897	-.9136	-.8728	-.5621	3.3431
家族認知:きょうだい	.1652	-.1676	-.3703	.7557	1.1832	-1.0842	-.0110	-1.2654
トラブルの有無:配偶者	.3276	.5491 +	.5112 +	-.1330	1.8382 +	-.9116	-.1777	-.3278
トラブルの有無:子ども	-.7010 +	-.2442	-.1524	-.9396	-.2857	-.4628	.5284	.8656
トラブルの有無:父親・母親	-.3490	-.5579	-.3884	.0925	1.0589	.5677	-.2712	.5405
トラブルの有無:兄弟姉妹	.2102	.5719	1.1722 *	2.2671 *	-.5943	-6.1797	.3287	-7.8747
定数項	1.9144	1.2735	.8086	-8.4653	-24.0517	4.4097	-2.6199	-18.1892
モデル $\chi^2$ (df=13)	52.593 ***	30.397 **	29.889 **	21.794 +	14.535	10.730	29.066 **	8.606

数値は非標準化ロジステック回帰係数

p < .001 \*\*\* p < .01 \*\* p < .05 \* p < .10 +

文献

Dizard, F.G. & Gadlin, H. *The Minimal Family*. The University of Massachusetts Press. 1990

井上眞理子・大村英昭編著『ファミリズムの再発見』世界思想社 1995

Marciano T.D. & Sussman M.B "Wider Families : New Traditional Family Forms" *Marriage & Family Review* Vol.17 No.1/2 1991

杉井潤子「サポート源としての家族の限界と可能性—サポートネットワークの視点から—」日本社会病理学会編『現代の社会病理』13号 1998

(2001年2月提出)

文部省科学研究費基盤研究 (A) : 10301010

家族生活についての全国調査 (NFR98) 報告書 No. 2-6

## 現代家族におけるサポート関係と高齢者介護

Support Resources and Care for the Aged of the Contemporary Family

石原邦雄・大久保孝治 編

2001年9月

日本家族社会学会  
全国家族調査 (NFR) 研究会